

日本聖公会組織成立100周年記念大礼拝説教

1987年5月16日

大阪カテドラル聖マリア大聖堂

旧約聖書／イザヤ書42:1-8, 使徒書／エペソ人への手紙2:1-17

福音書／マタイによる福音書5:1-12

日本に到着して僅か一週間しかたっていないとは到底信じられません。わたしたちは人の手と自然とによって織りなされ、創造された古き時代の壮麗でしかも美しい色々なものを味わわせて頂きました。同時にわたしたちは教会に多くの方々の愛情あふれるご厚意に接し、また日本聖公会信徒各位の熱心さにも触れさせて頂きました。わたしたちは日本の教会の歴史の一部を学んでおりますが、同時に激動する現代日本の姿に注目しております。このような中でわたしたちは今、皆さんが直面しておられるチャレンジにも注目しておきたいと思います。わたしたちは平和、つまり世界の平和についても心を向けてまいりましたが、それは神のみが与えて下さる平和についてであります。聖オーガスチンが申しましたように、「あなたはわたしたちをご自身のために創造されました。故にわたしたちの魂があなたの中に休息するまではわたしたちには（真の）休息はありません。

オーガスチンの生きた時代、それは世の中が変わりつつあるときでした。それは一種の崩壊しつつある世界とも言えましょう。つまりそれは現代社会で言えば指導層の交替や、大国間に見られる脅威の如きものでしょう。あるとき聖オーガスチンはヒッポの教会において、「主はあなたの国境を安らかにし」（詩147:14）という聖句を示しました。すると全会衆の中にため息の聲が上がったと伝えられています。先に引用したように、内なる平和に心を寄

せていたオーガスチンは、国と国との間の外なる平和にも心を寄せていたのです。同様にわたしたちもこの二つのこと、すなわちわたしたちの心の平和と国家相互間の平和を併せ保って行かねばなりません。

わたしたちは、神が過ぐる一世紀の間に日本聖公会の歩みの中でわたしたちに与えて下さったことどもを憶え、この祝典を行っています。わたしたちは日本聖公会を今日かくあらしめて下さった神を、この国で御用をつとめたヨーロッパやアメリカからの宣教師達に靈的息吹きと励ましを与えて下さった神を、また初代の日本人クリスチャンに力と忍耐する心を与えて下さった神を、そして、わたしたちすべての上に豊かな祝福を注ぎ続けておられる神を賛美し、感謝を献げるため、今日ここに集まっております。

ここには色々な教会から代表者の方々が列席しておられます。わたしどもの教会のように、初代教会の時代にまでさかのぼる古い時代よりの伝統を保持している教会もありますし、歴史も浅く若いけれども聖霊の賜物においては豊かなものをいただいている教会もあります。以前にはこんなことはなかったことですが、今わたしたちはここに集まり、お互いに学び合い、また他のキリスト者の伝統からも学ぶところ大いなるものがあります。お互いに批判したり、うらやましがったり、恥ずかしがったりするのではなく、わたしたちが共にわたしたちの父なる神、イエス＝キリストの父なる神を見つめて行くなれば、わたしたちの一致と任務を見出すことでしょう。

この礼拝のために選ばれた聖書朗読の個所は、わたしたちの続けてなすべき働きのいくつかの面を指摘しています。旧約聖書からの朗読は一連の「苦難の僕（しもべ）の歌」の最初のものですが、イザヤの言う「僕」とはイスラエルの民族のことであり、神のことばを宣言し、国々に正義を回復するため召されたしもべでありました。

教会の本来あるべき姿とは、とりもなおさず周囲にあるさまざまな必要に

対して心を配り、注意深くある「僕」としての教会、仕えるものとしての教会であります。従ってわたしたちは誰をも軽蔑することなく、また人々を今あるその状態によって見るのではなく、むしろその人々が神の霊によって新たにされる可能性を持つものとして見なければなりません。「僕」は光であるべきです。見えない人のためには目の働きを、捕われている人のためには解放者の役割を持つべきでしょう。これがわたしたちのミッション（働き）ということです。つまり、暗黒の世に光をもたらし、息詰まりそうになっている全ての人々のために新たな解放の場を提供することです。

一億を超す日本の人々の内には、失敗のため挫折感の中で見捨てられたと思っている人々、富や成功を争う競争社会について行けず、除けものになっていると考えている人々、等が多くあります。特にこのような人々のためにこそ奉仕すべく召された者がクリスチャンであると言わねばなりません。

教会のようにもろく傷つきやすい存在がどのようにすればその召命にかなう生き方をすることができるのか、疑問視したいという誘惑にわたしたちはしばしばかられます。教会は少数者であってその掲げている光は極めて弱々しいものであり、また世に「僕」としてひざまずいているようではその足下に踏みにじられてしまうだろうと心配せざるを得ません。

しかし、予言者イザヤが語りかけた民衆とは、それほど重要ではない国の国民であり、より大きな、そしてより恐ろしい力の前にあえいでいた人々であったことを銘記しておきたいと思います。彼らは仕える「僕」として、どのように地上に平和を打ち立てることが出来るのでしょうか。あるいは、異邦人の世界を照らす光になり得るのでしょうか。しかし、彼らは神によって召された民族でした。「しかし見よ。わたしの僕、わたしが支える者を。わたしが選び、喜びむかえる者を。」（イザヤ42:1）

本日の使徒書では、教会は単に神の新しい秩序を宣言するのみでなく、それを実証すべく召されていることにわたしたちの注意を喚起しています。最近ロンドンにおいてデズモンド・ツツ大主教は南アフリカにおける悲劇的な人種対立に関わる神のメッセージを語られました。ウェストミンスター・アベイにおいて、彼はこれと同じ聖句にもとづいて説教されたのです。「実に、キリストは私たちの平和であります。…敵意という隔ての壁を取り壊し…」(エペソ2:14) 神との交りに入れられた者として、またわたしたちの住む社会に平和と調和の賜物を提供すべきものであります。わたしたちの生活のすべての側面で不和とか分裂とかいったたぐいのことは全部打破されねばならないのです。

敵意をいだいていたその中に新しい連帯感、新しい一致が可能になってきます。そこにこそ国籍や身分を越えたすべての人々の平和があるのです。

わたしたちがみな神の子供であり、キリストにあっては兄弟姉妹であることを認識するとき、教会はあたかも一つの家族であるように考えられます。家族の中ではひとりびとりがかけがえのない存在です。ひとりびとりが個人としてとうとばれます。そしてそのことはキリストご自身が人々に接された接し方のいくぶんかを反映すると言えましょう。人は、それが誰であるにせよ、神が重要と見ておられるが故に重要なのです。イエスは周辺にいた人々を物語の中へと招き入れられました。招待状なしに晩餐会にもぐり込んだ婦人、パンと魚の入ったお弁当を持っていた少年、木の上に登っていた不正直な取税人。イエスは人がどう思うかを一向気にされず、これらの人々を重要とされて物語の中に招き入れられました。

家族ということで考えられる第二の点は、それぞれがその役割に応じてお互いを助け合い、バランスを保つということでしょう。日本ではどうなのか、わたしには判りませんが、わたしたちの国(英国)では父親はしつけ役であり、母親は宗教を当然の常識と考える人物です。十八歳の少年はわたしたち

が1887年ではなく1987年に生きているのだということを思い起こさせてくれます。彼は偉大な運動を支持し、不正と戦うことを望んでいます。しかし彼の姉は平和をつくり出す者であり、宗教は主としていやしと赦しに関わるものだと信じている人かも知れません。

さて、教会ではこのようにさまざまな御霊の賜物があるべきなのです。わたしは教会の会衆を見るたびに、到底他では見ることの出来ないような集団を見出してうれしく思うのです。それは、この集団の人々が社会での地位、年令、政治上の見解等から生じるギャップを克服しているからです。意見は分かれていても、キリストにある一致を保っているのです。

家族について第三に言えることはこれです。すなわち、あまりにもその愛が内輪向きで取り込む傾向ばかり強い場合には、その家庭は息詰まってしまう。しかし、もし家庭が世の中における行動のための基地として用いられるならば、それは必ず成長して行くことでしょう。教会についても同じことが言えると思います。もしわたしたちがいつも自分自身のことしか眼中にないようだと、わたしたちは萎縮していくでしょう。しかし、もしわたしたちを言葉や行動によってこの世に与えて行くならば、教会は成長し、盛んになることでありましょう。

さて、ここに本日の福音書があります。山上の説教中の八つの至福のうちに、イエスは決して法律上のきまりを設けられたものではありません。イエスはわたしたちに人生に関する神の道を示されたのです。それは良きおとずれであり、わたしたちの先入観や偏見、誇りや力や自信を覆してしまうものでした。むしろ神は心の貧しい人に目を向けられます。おさなごの如くある人、自らの弱さ、足りなさを認めている人、このような人を神は求めておられるのです。そこで「主は…権力をふるう者をその座から降ろし、身分の低い人を引き上げ、飢えた人を良い物で満たし、富んでいる人をむなしく追い返さ

れる」(マリヤの讃歌、ルカ1:51-53)

この至福のメッセージの中には純粹さと単純さがあり、わたしたちがもつ多くの思いわずらいや心配ごとから生じる幾多の混乱を貫き通す輝きのようなものがあります。キリストは何ら特別な分けへだてや条件をおつけにならないで、きわめてはっきりした言い方で命じ、また確信をもって約束をお与えになりました。「憐れみ深い人々は、幸いである。その人たちは憐れみを受ける。心の清い人々は、幸いである。その人たちは神を見るであろう」。ここには一切のあいまいさが取り払われた正しい道が示されています。もしわたしたちが神の国の民としてこの世に生きることを意味を尋ねるならばここにその解答を見出すのであります。

今日の時代に平和を探究することは、不可能とも思えるほど複雑であります。それは常に利害の対立や政治上のかけひきがつきまとっているからであります。信頼の足りないこと、希望のないことが原因して、結果的に強いもののだけが正しいといった信念に固執することとなっているのです。イエスはこれに対してただ「平和を実現する人々は、幸いである」とだけ言われています。

しかし平和というものは正義を抜きにして決して得られるものではありません。平和ということは痛みを感じることも値を払うこともなく、おだやかにしかも容易に得られた妥協といったようなものではありません。聖書に基づく宗教、ユダヤ教とキリスト教以外の宗教では、すべての事の終りと始まりは「永遠の静けさ」だと言われています。しかしキリスト教信仰の観点から言えば、そこにこそ聖パウロが言う「人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安」(ピリピ4:7)があります。なぜならそれは痛みを伴う平和と いうことだからです。

キリスト教は十字架の宗教と言われます。聖書には喜びや悲しみについて

多く書かれています。幸福ということについてはそれほど多くありません。わたしたちがキリストと共に死ななければ彼と共に生きることはないと書かれています。イエスが言われたように、生命を得るためにはそれを失う必要があります。わたしたちは自分の十字架を負って彼に従うのであります。クリスチャンにとって生命は死ぬことを通してのみ得られるのであり、悲しみを通してこそ喜びが得られるのであります。

今日の時代にこの世界においてわたしたちが神の平和の器であることを願うならば、そのために生ずる困難、犠牲を恐れるべきではありません。本日の使徒書が示しているとおりの、平和を追い求めるということは障害となるものが取り除かれねばならないということです。例えば、わたしたちの教会を単に快適で心地よい社交の場、あるいは敬虔ではあるが内側のことだけを考えているグループにしておいてはなりません。そうではなく、教会は世界に向かって、また世俗の社会が熱望している事に対して常に開かれた共同体であり、また他宗教の、あるいはすべて誠実な心で真理を求めている人の願いを理解するのにやぶさかであってはならないと思います。

平和をつくり出す人は決して排他的な考え方をしてはなりません。自分の業績についても、自分の属する教団についても、いかなる誇りもそこには存在してはなりません。ピカステス主教は1887年、すべての人を包容しうる教会という姿勢を明示いたしました。これが聖公会の使命であり、唯一の聖なる公会の肢であるということでもあります。皆さんもわたしもともにわたしたちの生涯と目的をあらゆる方法、手段をもって表現することに務めようではありませんか。それはとりもなおさず、すべてを包む神の愛を反映することでありましょう。

このことは、どれも容易なことではありません。値なしに得られるものでもありません。教会が仕えるものでもあり、平和の担い手であるためには犠牲が求められます。このことはヨーロッパ、アメリカにおけると同様に日本

においても本当にそのとおりだと思います。教会が教会の主と福音に忠実であるならば、それ以外の道があり得ましょうか。なぜなら神の愛は何よりもまず十字架において示されました。その十字架こそわたしたちを永遠の生命に、全き自由に、人知では測り知ることのできない平安に導くものであります。

昨年十月、イタリアのアッシジにおいて平和記念の集会がありました。世界の主だった宗教の代表者たちがそこに出席しておりましたが、それは今日の世界において宗教がどのような貢献をなしうるかということの、印象深い証の機会でありました。わたしたち代表者は一緒にひとつのステージに登りましたが、こんなことは今日の国家指導者や政治指導者にとっては到底不可能なことでありましょう。

しかもそこには安易な、あるいは偽りの妥協などという感は一切ありませんでした。ローマ教皇がキリスト教を代表して発言されたとき、彼はこう語りました。「わたしにとって平和という言葉にはいつもイエス＝キリストの名前が伴っている」と。わたしたちはその日、聖フランシスの小さな像から感銘を受けずにはおられませんでした。わたしたちは誰も、将来に向けてわたしたちを力づけてくれるような記念の機会、場所を必要としています。アッシジはそのような場所であり、その集会はそのような機会でありました。

この礼拝のためにここに集められたわたしたち一同は感謝の思い、信仰刷新の思いで満たされています。1987年の大阪はもう一つの機会、もう一つの場所となってくれることでしょう。聖フランシスのものとされているこの祈りは、わたしたちがどこにあってもわたしたちの宣教の働きを新たにすることを助けてくれます。その祈りをもってわたしはこの説教を終えたいと思います。

主よ、わたしたちを平和の器とならせてください。

憎しみのあるところに愛を、

争いのあるところに赦しを、

分裂には一致を、

疑いのあるところに信仰を、

望なきところに希望を、

暗きには光を、

嘆きあるところには喜びを、もたらすものとしてください。

（訳・山根貞夫司祭）